

問題：『東アジア国際政治史』の以下の問題から二問選び回答しなさい(左側＝章、右側＝問題) 1-1、3-2、4-3、5-1、6-3、8-2、9-3、10-1、12-1

●総評

『東アジア国際政治史』に基づいたレポートの採点を終えた。採点に当たっては、まず与えられた問いに正面から回答しているかどうか、テキストや授業を(反論するにしても)ふまえているか、文章として意味が伝わるかどうか(説明には根拠や事例があげられているか)、といった基本的な点を考慮した。この点は他の大学におけるレポートの採点と同じである。

採点を終えての感想は、必ずしも芳しいものではない。もちろん、たいへん優秀な答案もあったのだが、全体として小生が授業をおこなっている他の二校と比べても予想を下回るできであったと言える。第一に、メールでレポートを提出するのに、メールそのものに本文を書かず、ただ添付ファイルだけを送ってくるという問題。二十人を超える学生がそうであった。そして、本文はあっても、宛名も差出人名もないという問題。これは、携帯メール世代としてはわかるところだが、しかし他大学では見られない現象である。いったいどうしたものだろう。第二に、日本語の文章の問題。「てにをは」のみならず、「は・が」についても、もう少し推敲をしてほしい。第三に、参考文献の記し方。論文が「」で、著作が『』といったような、基本的なところがぼっさり落ちているという印象である。

そして何よりも、ネット上の記事からのコピペの多用である。授業中に何度も注意したにもかかわらず、このような事態になったこと、非常に悲しい。「不可」は出したくなかったが、本人に聞いたとしても返事もなく、また修正版が出てきたわけではないので、「不可」にせざるを得なかった。非常勤で不可を出すというのは、つらいことである。

このような、いわば形式用件の部分だけで、だいぶ書いてしまった。内容的にはテキストをまとめようとしてもものも多かったが、授業のノートと照らし合わせて書いて欲しかった。

●各問題に関するコメント

◆第一章(1)

「日本、朝鮮における「華夷・海禁」体制について、「鎖国」「長崎貿易」「朝鮮通信使」などから調べてみよう」という課題なのだから、華夷、海禁体制を、この三者を事例として説明できるかということ。まず、華夷・海禁を定義した上で、鎖国もまたその枠の中で理解できる可能性を述べ、他方で日本の場合には長崎貿易のように「互市」で理解したほうがよいものがあること、そして朝鮮通信使のように「華夷」によって理解することができるものが、どのように機能していたのかということ

対馬の存在などから、述べるなどすればいい。

◆第三章(2)

「日露戦争の前後で、東アジア情勢はどのように変化したか」という問題なのだから、東アジアで何がどのように変化したということをまとめてほしかったのだが、答案の多くは、歴史的な過程を時間軸にそくして記していた。そうすると、何がどのように変わったのかということがわからなくなってしまう。また、日本の戦争での勝利とそれにとまなう変化だけに注目して、中国の情勢、朝鮮の状態などについて言及しないものも目立った。

◆第四章(3)

「中国をめぐる東アジアの国際政治において」、「日本が突出していく過程」と「列強の対応」をまとめる。まず、1901年の北京議定書、あるいは辛亥革命前後における列強の中国に対する共同関与のありかたについて記述した上で、第一次世界大戦当時の状況、対華二十一カ条要求、それへのアメリカやイギリスの反応、ひいては中国での反日運動についてまとめればいい。「何から突出」したのか、と書かれた人は、1901年の枠組み形成がまったく記されていない答案。

◆第五章(1)

ワシントン体制の形成について多く述べるのではなくて、天津条約、辛丑和約、日英同盟以来の中国をめぐる国際秩序が、第一次世界大戦に際しての日本の外交により再編する必要に迫られ、海軍軍縮をとまなうかたちで、借款団の再編と辛丑和約の再確認をおこない、それにより日本の突出を防ごうとしたのが、ワシントン体制だということを述べられればいい。また、ソ連、ドイツ、そして広東政府(国民政府)がこの体制に加わっていなかったことや、金フラン案などの影響で関税会議の開催が遅れたことが、この体制を動揺させ、南京国民政府の形成を経て、日本の満洲事変に至る過程で、体制としての機能が失われていくということが示せればいい。

◆第六章(3)

「日中全面戦争はどのようにして阻止できなかったのか」という大きな課題。これについても、歴史過程を叙述しているものが目立った。あくまでも「なぜ」という問いに答えるものであることに留意してほしい。また、日本側の要因だけでなく、中国側が日本との戦争を決意したこと、国際情勢についても触れることが望まれる。また1935-36年における和平交渉が頓挫した原因、盧溝橋事件が局部的紛争にとどまらなかった点についても論じて欲しい。

◆第九章(3)

「日本の戦後復興にどのような国際政治上の背景があったのか」という課題。さまざまな書き方があるが、世界および東アジアにおける冷戦の形成をまず論じ、そのうえで中国をめぐる国際情勢の変容、そしてアメリカによる対日賠償政策の変容過程を述べるのが妥当だろう。その上で、冷戦

のひとつのあらわれである朝鮮戦争と朝鮮特需を述べれば、優の答案となる。

◆第十二章(1)

1970年代と80年代の連続性と断絶性を述べる問題。1970年代は、日中国交正常化、日中平和友好条約の締結などが見られ、関係が制度化されたが、1980年代にはそうした枠組みの下での関係が緊密化した時代といえる。だが、そうした関係の緊密化とともに、歴史認識問題などの90年代以後の関係悪化の序曲となる事象も見られ始めている。また、天安門事件では、日本の対中援助が一時的に凍結されるなど、緊張する事態になった。

このほかの問題は選択者が少なかった。

●成績について

受験者： 全86名（法学部生78名、大学院法学研究科5名、公共政策大学院3名）

成績： 法学部生＝秀3名、優27名、良40名、可7名、不可1名

法学研究科修士＝優5名

公共政策大学院＝秀1名、優2名

合計：秀4名、優34名、良40名、可7名、不可1名

以上。